

池田大作の「人間主義」的中国観

——小説『新・人間革命』が描く「金の橋」——

宮 川 真 一

はじめに

SGI（創価学会インタナショナル）会長の池田大作は、日中友好の「金の橋」を築いてきた。そして、中国は国を挙げて池田の思想と行動を称賛している。池田は1968年に「日中国交正常化提言」を行い、1974年に初めて中国を訪れた。それ以来10度の訪中を重ね、さまざまな次元で交流を繰り広げてきた（『聖教新聞』2018.9.8）。中国の大学・学術機関での講演は6回、中国の識者との対談集は10点を数える。こうした業績に対し、中国の大学・学術機関は120の名誉学術称号を池田に授与してきた（創価学会 2020a）。いま中国では「池田思想」に関心が集まり、この国のおよそ40に上る大学・学術機関が「池田思想研究」機関を設けている（『聖教新聞』2019.6.3）。

池田がこの中国をどう観ているのかについて、日本では十分に解明されているとはいえない。池田の中国観について、日本語では以下の先行研究がある。総合雑誌『潮』は、池田の「日中国交正常化提言」を3度特集している。その中で、「日中国交正常化提言」をめぐる池田の中国観に言及している。（『潮』2006.6：120-1；2006.7：120、135；西園寺 2008：204-5；^{もう}孟 2008：206-7）。池田の中国観を論じている唯一の学術論文として、樋口勝による研究を挙げることができる。この論文では尖閣諸島問題を検討するなかで、池田による「日中国交正常化提言」に論及している（樋口 2013：68-71）。月刊誌『第三文明』では、^{こ きんてい}胡金定による連載記事が掲載されている。「創価学会と中国——日中友好の懸け橋担う創価学会の真実」と題する連載は、2016年11月号から2019年9月号まで35回続いた。そして、「池田大作と中国——万代にわたる日中友好」と題する連載が2019年10月号から続いている。これらの記事のなかで、胡は池田のさまざまな著書や各種資料を幅広く参照し、その中国観にも随所で論及している（胡 2017.6：72、2017.7：72、2017.8：72、2017.10：71-2、2017.12：75-6、2018.1：72、2018.2：79-80、2018.3：70-2、2018.4：85-6、2018.5：72、2018.6：71、2018.10：70-3、2018.11：74-6、2019.1：72、2019.2：76、2019.3：71、2019.4：85-6、2019.5：72、2019.6：71、2019.10：72、2019.11：70-2、2020.2：71-2、2020.3：

74-6、2020.4:70-2)。

本稿の目的は、池田の中国観を全体として明らかにすることである。その際、池田の著作である小説『新・人間革命』を分析対象とする。以下ではまず、『新・人間革命』とその分析方法を説明し、同書における中国への言及について量的に論じる。次いで、池田の中国観を5つのテーマに分析し、それぞれを質的に論じていく。すなわち、「日中国交正常化提言」発表、日中関係における信義の絆、中国とソ連の懸け橋、日中友誼の民間交流、創価大学と「周夫婦桜」である。最後に、全体を要約して本稿の結論を明示したい¹⁾。

1. 『新・人間革命』と分析方法

小説『新・人間革命』は池田大作の最も重要な著書の一つである。池田はこの小説を1993年から2018年にかけて『聖教新聞』に連載した。新聞連載回数としては日本最多の6469回に上る。著者が65歳から90歳までの25年間続いた連載は、単行本の全30巻として結実した。現在、13言語で翻訳され出版されている(創価学会 2020b)。著者によれば、「私の足跡を記せる人はいても、私の心までは描けない。私でなければわからない真実の学会の歴史がある」(①:2)²⁾。同書は次の主題を掲げている。「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」。そして、こう始まる。「平和ほど、尊きものはない。平和ほど、幸福なものはない。平和こそ、人類の進むべき、根本の第一歩であらねばならない」。ここには、創価学会による人間革命運動の目的は、全人類の幸福と平和の実現にあることが示されている。同書は池田が第三代会長となった1960年から、学会が目標としてきた2001年にいたる学会の歴史を中心に描いている。著者は同書によって、『『創価の精神の正史』と『真実の信仰の道』を後世にとどめ』ようとしている(③⑩下:440-5)。

『新・人間革命』は世界中の創価学会員に大きな影響を与えている。日本の学会では、2020年の活動方針として宗教分野に3つの柱がある。その3つ目に、同書の研さんが挙げられている(『聖教新聞』2019.11.19)。さらに、同書の研さん運動は192カ国・地域に広がるSGIでも大きなうねりとなっている(『聖教新聞』2019.9.6)。佐藤優は、「池田の『人間革命』と『新・人間革命』の解釈を抜きにして創価学会の内在的論理をとらえることはできない」としている(佐藤 2020:32)。また、池田博正によれば、「『新・人間革命』は、後世の学会員の依拠となる『文証』とも言える」(池田博正 2018)。したがって、同書は世界中の創価学会員の中国観にも影響を与えていると考えられる。

また、『新・人間革命』は世界の識者からも高く評価されている。ヘンリー・インダンガシによれば、「『新・人間革命』は「世界の十大小説」の一つである。20世

紀から21世紀にかけて、失われる恐れのある人間主義の真髄を、文学に回復することに成功した」(インダンガシ 2018)。N. ラダクリシュナンは、「この小説に比肩できるのは、トルストイの『戦争と平和』くらいではないか」と語っている(ラダクリシュナン 2018)。

本稿は、この『新・人間革命』全30巻を分析対象としている。同書は池田にとってライフワークの一つである。この小説は著者が90代を迎えた年に完結した。ここには著者の中国観が集大成されていると考えられる。そして、本稿では創価学会の機関紙『聖教新聞』の公式サイトである「SEIKYO online」の「人間革命検索サービス」を利用している。同サービスで『新・人間革命』全30巻を対象とし、キーワードを「中国」で検索した。その際、日本の一地方としての「中国」など、国名としての「中国」を表示しないページは含めていない。その結果、640のページが該当した。本稿では中国に言及したこれらのページを、量的および質的に考察している。こうした作業により、池田の中国観を総合的に検討している(聖教新聞社 2020)。

2. 『新・人間革命』の量的考察

まず、『新・人間革命』では「日中国交正常化提言」と第1次から第5次までの訪中を中心に描いている。図1は各巻で「中国」に言及したページ数を示している。ここに見られるように、同書ではすべての巻で中国に言及している。そして、5つの巻で中国を大きく取り上げている。第13巻における「金の橋」の章は、「日中国交正常化提言」がテーマである。第20巻「友誼の道」では初訪中を、「信義の絆」では第2次訪中と周恩来総理との会見を描く。第21巻「人間外交」では第3次訪中、第28巻「革心」では第4次訪中、第30巻「雄飛」では第5次訪中について綴っている。

次に、中国に言及したページの主旨(最も中心となる事柄)は256に上る。これらを分野別に分析すると、「民間交流」分野の主旨は69を数える。ページ数が多い順に上位10位までを挙げると次のようになる。中日友好協会、北京^{ペキン}大学、中国^ベ青年代表団、第1次訪中、孫^{そん}平^{へい}化^か、廖^{りょう}承^{しょう}志^し、呉^ご月^{げつ}娥^が、復^{ふく}旦^{たん}大^{だい}学^{がく}、新^{しん}華^か小^{しょう}学^{がっこう}校、第1次訪ソ。「仏教・創価学会」分野では68の主旨を数える。上位10位は日中国交正常化提言、周^{しゅう}志^し英^{えい}、創価学会、周^{しゅう}志^し剛^{こう}、梶^{しゅう}山^{せん}久^{じん}雄^{しん}、朱^{しゅ}千^{せん}尋^{じん}、ブルー・ハワイ・コンベンション、本部総会、韓国、関西青年平和文化祭となる。「平和・文化・教育」の分野には45の主旨が含まれる。上位10位は中国^{ちん}国^{ごく}費^{へい}留^{りゅう}学^{がく}生^{せい}、『21世紀への対話』、巴^ぱ金^{きん}、魯^ろ迅^{じん}、創価小学校、中国研究会、創価女子学園、「四季の雁書」、有吉佐和子、核兵器廃絶となる。「政治・経済」分野には41の主旨がみられる。上位10位は鄧^{とう}穎^{えい}超^{ちょう}、日中^{にちちゅう}平和友好条約、周^{しゅう}恩^{おん}来^{らい}、鄧^{とう}小^{しょう}平^{へい}、松村謙三、アレクセイ・コスイギン、日中国交正常化、李^り先^{せん}念^{ねん}、公明党、ノロドム・シアヌークである。「歴史・国際関

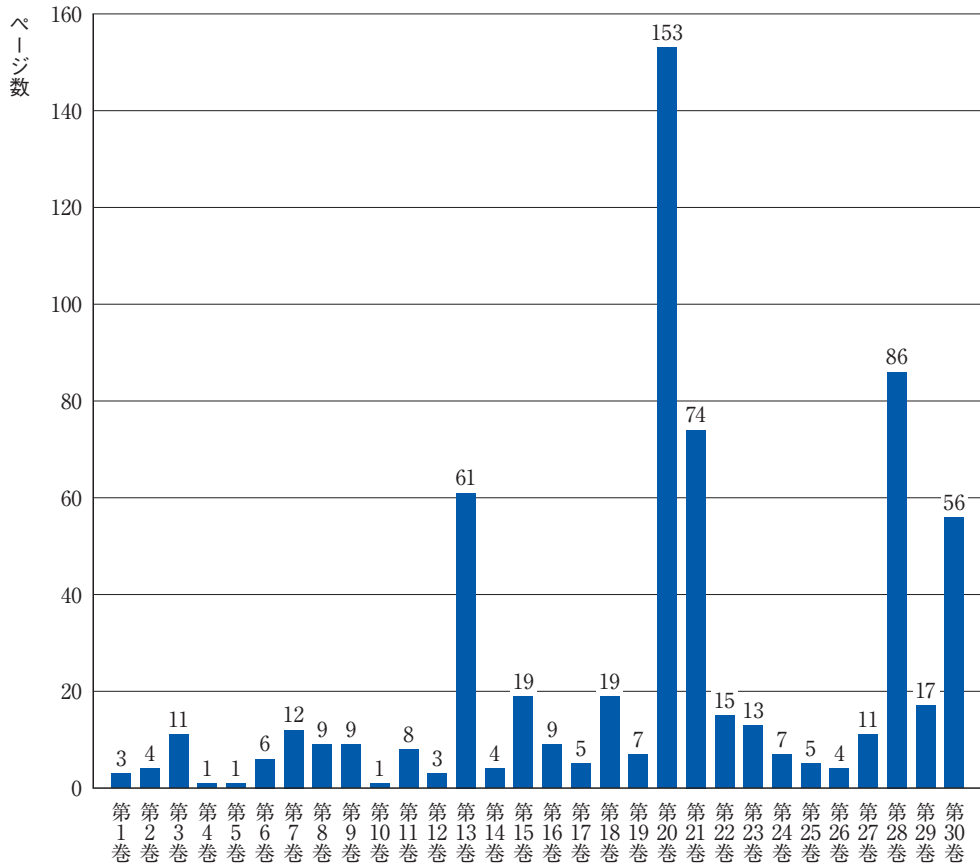


図1 『新・人間革命』巻別「中国」言及ページ数

係」の分野には33の主旨がある。上位10位は中ソ対立、ベトナム戦争、孫文^{そんぶん}、中ソ関係正常化、日中関係、諸葛孔明^{しよかつこうめい}、中国問題、雨花台烈士陵園^{うゐかだいれつしりょうえん}、南京^{なんぎん}、ニクソン訪中であつた。

さらに、『新・人間革命』では「民間交流」を重視している。図2は、同書のなかで「中国」に言及したページ数と割合を分野別に示している。分量が多い順に「民間交流」、「政治・経済」、「仏教・創価学会」、「平和・文化・教育」、「歴史・国際関係」となっている。

最後に、『新・人間革命』は中国を肯定的に描いている。同書では中国がどの方向に描かれているかを調べた。それによれば、中国の肯定的側面を描く420ページは全体の66%を占める。中国を中立的に描く173ページは27%になる。そして、中国の否定的側面を描く47ページは7%であつた。

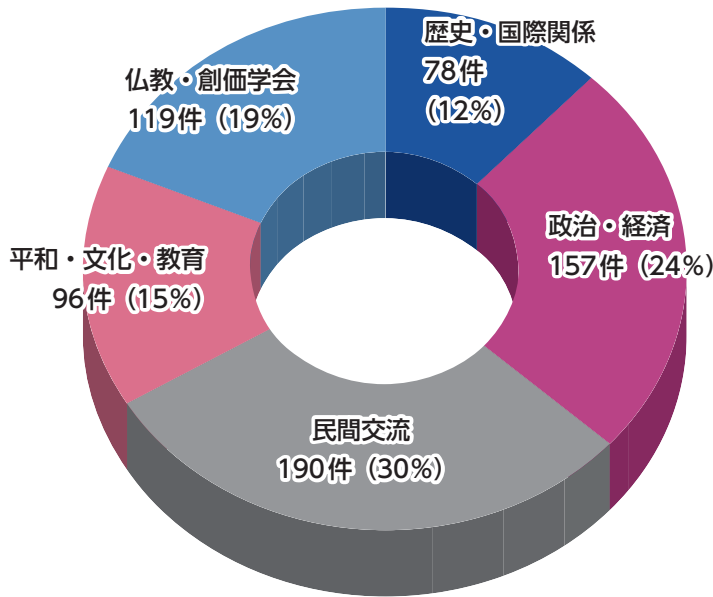


図2 『新・人間革命』分野別「中国」言及ページ数

3. 「日中国交正常化提言」発表

池田大作は「日中国交正常化提言」を発表し、日中国交正常化の突破口を開いている。1968年9月には創価学会の学生部総会が予定されていた。当時、池田は創価学会の会長を務めていた。池田はこの総会で、「未来永遠にわたる日中友好の大河を開くために、中国問題について提言を行うことを、心深く決意していた」。この頃、中国の人口は7億を超えていたが、国際社会では孤立していた(⑬:8-9)。それゆえ池田は、中国を一日も早く国際舞台に登場させることが日本の国際的使命であると考えていた。なぜなら、日本は「歴史的伝統、民族的な親近性、地理的条件など、どの観点からみても、中国とは深い関係があるから」である(⑬:10)。「この縁も深き、計り知れない大恩の国である中国を、かつて、日本は侵略した。悪逆非道の限りを尽くした。なんたる不知恩、なんたる傲慢か！ だからこそ、伸一³⁾は、一人の日本人として、また、仏法者として、中国、そして、アジアの人びとの幸福と平和のために、一身をなげうつ覚悟を決めていた」のである(⑬:11)⁴⁾。

池田は「日中国交正常化の提言に踏み切ることが、いかに危険の伴う決断であるか、よくわかっていた」。しかし「私が、発言するしかない！ 私は仏法者だ。人びとの幸福と世界の平和の実現は、仏法者の社会的使命である。何が起ころうと、断行する決意を固めるしかない！ 私の考えが正しかったかどうかは、後世の歴史

が証明するはずだ。」と提言の発表を決断したのである（⑬：43）。

1968年9月8日、創価学会第11回学生部総会が東京都墨田区の日大講堂で開催された。池田は会長講演のなかで、「日中国交正常化提言」を発表する。中国問題を解決するため、池田は次の3点を訴えた。「第一に、中国の存在を正式に承認し、国交を正常化すること。第二に、国連における正当な地位を回復すること。第三に、経済的・文化的な交流を推進すること」であった（⑬：52-62）。

池田は、提言に踏み切った理由についてこう述べている。「私は、決して、共産主義の礼賛者ではありません。ただ、国際社会の動向のうえから、アジアはもとより、世界の平和のためには、いかなる国とも仲良くしていかななくてはならないということを訴えたいのです。核時代の今日、人類を破滅から救うか否かは、この国境を超えた友情を確立できるか否かにかかっているといっても過言ではない」。このように、池田は「単に国家の対応を論じようとしたのではなく、民衆次元から、中国、そして、世界との関わりを考えていた。国交も、その本義は人間の交流にあり、民衆の交流にある。友情と信頼の絆で、人間同士が結ばれることだ。国家といっても、それを動かすのは人間であるからだ」（⑬：63）。

当時の日本では、中国が侵略的で危険な国であるとの見方があった。そこで池田は、「毛沢東主義は本質的には民族主義に近く、東洋的な伝統を引き継いでいる」と分析し、中国が「武力をもって侵略戦争を始めることは考えられない」と主張したのである（⑬：63-4）。この提言は、池田が「アジアの平和を願う仏法者としての信念のうえから、命を賭しても新しい世論を形成し、新しい時流をつくろうとの決意で、発表したものだ。だから、いかなる中傷も、非難も、迫害も、弾圧も、すべて覚悟のうえであった。伸一に恐れなど、全くなかった」のである（⑬：75-6）。

4. 日中関係における信義の絆

池田大作は日中国交正常化に決定的な役割を果たし、周恩来と永遠の友情を結んでいる。1964年11月、党本部となる公明会館の落成式が行われ、公明党の結成大会が開かれた。公明党を創立した池田が「政策について提案したことは、ただ一つであった。それは、党の外交政策の骨格をつくるにあたり、中華人民共和国を正式承認し、日本は中国との国交回復に努めるべきである、ということであった」（⑨：362-5）。

1970年3月、池田は松村謙三と会談する。日本の松村と中国の周恩来は、日中友好の二つの柱であった。松村は池田にこう語る。「あなたは中国へ行くべきだ。いや、あなたのような方に行ってもらいたい。ぜひ、私と一緒に行きましょう」。「ぜひとも、あなたを周恩来総理に紹介したいのです」。松村は、池田に日中国交正常化を託そうとしていた（⑬：79-82）。「松村の思いが、痛いほど伸一の胸に染みた。

自分への期待を、ひしひしと感じた」。池田は、宗教者の自分が中国を訪れるのではなく、自ら創立した公明党が訪中することを提案する。この提案に安堵する「松村先生の志を、受け継がねばならない、と、伸一は心に誓った」(⑬：83-4)。

1971年6月、池田は訪中前の公明党幹部と会見している。その際、「私の名前を出す必要は、一切ありません。あくまでも、誠心誠意、中国の指導者の話を伺い、誠心誠意、友好を進めていくことです」と語った(⑬：85-6)。

1972年7月、公明党は中国に代表団を派遣した。国交正常化に向けて日本政府とのパイプ役を務め、総理の周恩来と国交回復への交渉を進めていった。「日本政府にとって最大の難問は、日本が中国に与えた戦争被害の賠償であった。対日戦争での中国側死傷者は3500万人、経済的損失は直接・間接合わせて総額6000億ドルともいわれる」。しかし、周はその対日賠償の請求を放棄すると、公明党との会談において明言したのである。周の考えでは、「かつて中国は、日清戦争に敗れ、日本に多額の賠償を払った。そのため、中国の人民は重税を取り立てられ、塗炭の苦しみをなめた。戦争は一部の軍国主義者の責任だ。日本の人民も軍国主義の犠牲者である。その苦しみを日本の人民に味わわせてはならない」。「これによって、日本がどれほど救われるか——伸一はそう思うと、いかに感謝しても、しきれるものではないと思った」(⑳：17-8)。

公明党が国交正常化のパイプ役となりえた背景には、池田の「日中国交正常化提言」があった。「伸一は、平和を願う一人の人間として、言うべきことを言い、行うべきことを行ってきたにすぎないと考えていた。また、自分は、歴史の底流をつくればよい。日中の国交正常化が実現できれば、自分のしたことなど、誰も知らなくてよいと思ってきた。ところが、周総理は、公明党に光をあて、提言を行った伸一への、厚情を示してくれたのだ。伸一は、総理のその誠実さに、『飲水思源』(水を飲む時、源を思え)との、中国の名句が思い起こされ、胸が熱くなるのを覚えた」(⑬：95-6)。

1972年9月、日中共同声明の調印式が行われ、日中国交が樹立した。このとき池田はこう思った。「今、日中国交の扉は開かれた。しかし、政府レベルの国交だけでは、真実の正常化には至らない。大切なことは、友情の橋、信義の橋を架け、民衆の心と心が、固く、強く結ばれることだ。民衆は海だ。民衆交流の海原が開かれてこそ、あらゆる交流の船が行き交うことができる。次は、文化、教育の交流だ。人間交流だ。そして、永遠に崩れぬ日中友好の金の橋を築くのだ!、彼のこの決意を知るものは、誰もいなかった」(⑬：96-7)。

1974年12月、池田は周恩来と会見している。周はこう話した。「山本先生は、中日両国人民の友好関係は、どんなことがあっても発展させなければならないと、訴えてこられた。私としても、非常に嬉しいことです。中日友好は私たちの共通の願望です。共に努力していきましょう」。池田は「その言葉に、中日友好の永遠の道

を開こうとする、総理の魂の叫びを聞いた。また、平和のバトンを託された思いがした」。周は目を輝かせて、「私は、未来のために中日平和友好条約の早期締結を希望します」と語った。「20世紀の最後の25年間は、世界にとって最も大事な時期です。全世界の人びとが、お互いに平等な立場で助け合い、努力することが必要です」との周の言葉に、池田は「遺言を聞く思いであった」。池田は「周総理といつまでも話し合っていたかった」が、彼の体調を気遣って会見を切り上げた。「周総理と伸一は、これが最初で最後の、生涯でただ一度だけの語らいとなった。しかし、その友情は永遠の契りとなり、信義の絆となった。総理の心は伸一の胸に、注ぎ込まれたのである」(⑳: 337-45)。

5. 中国とソ連の懸け橋

池田大作は中国とソ連の懸け橋となり、中ソ関係正常化に大きく貢献している。1969年3月、ソ連と中国の国境警備隊の間で武力衝突が起こった。さらに、7月にも中ソの軍事衝突が発生した。中国側は強い脅威をいだき、北京市内では地下壕が建設され始めた。中ソ関係は悪化の一途をたどっていた。池田は「核を保有する中ソが戦争となることを、最も恐れていた。この事態だけは、絶対に阻止しなければならないと考えていた。そのために、生命をかけることも辞さない決意であった」(⑳: 58-9)。池田は「中ソ両国を訪問し、人間主義に生きる仏法者として、平和の道を開かねばならないと考えていた」(⑲: 303)。

1974年6月に初めて中国を訪問した池田は、中日友好協会の張香山^{ちやうこうざん}副会長に尋ねた。「中国は他国を攻めることはありませんか」。張はこう断言した。「中国の歴史は、他国による侵略と圧迫の歴史でした。私たちは、独立の尊さと、侵略の悲惨さを身に染みて感じております。したがって、中国が他国を侵略することは、絶対にありません」。池田は、「この回答の意味は大きいと感じた」(⑳: 55-60)。この訪中で、池田は北京の地下防空壕を視察する。「伸一は、ソ連の攻撃に危機感をいだき、恐怖に苛まれながら、自らを鼓舞して生きる、中国の人たちの心中を考えると、胸が張り裂けそうな思いがした」。そして池田は「中ソの不信の溝を、絶対に埋めねばならぬ、と、心に誓うのであった」(⑳: 86-7)。

1974年9月にソ連を訪問した池田は、首相のコスイギンと会見する。2人の間でこのようなやりとりがあった。「ソ連の人びとと同様に、中国の人びとも、平和を熱願しております。中国は、決して侵略主義の国ではありません」。「中国の首脳は、自分たちから他国を攻めることは絶対にないと言明しておりました。しかし、ソ連が攻めてくるのではないかと、防空壕まで掘って攻撃に備えています。中国はソ連の出方を見えています。率直にお伺いしますが、ソ連は中国を攻めますか」。「いえ、ソ連は中国を攻撃するつもりはありません。アジアの集団安全保障のうえで

も、中国を孤立化させようとは考えていません」。「そうですか。それをそのまま、中国の首脳部に伝えてもいいですか」。「どうぞ、ソ連は中国を攻めないと、伝えてくださって結構です」(⑳: 267-78)。

1974年12月に再び中国を訪れた池田は、日中友好協会の廖承志会長夫妻一行と懇談する。その際、池田は廖にこう語った。「私は9月にソ連を訪問し、コスイギン首相と会談しました」。「首相は、明確に、こう言われておりました。『ソ連は中国を攻撃するつもりはありません。アジアの集団安全保障のうえでも、中国を孤立化させようとは考えていません』また、その発言を、中国の首脳に伝えることも、コスイギン首相の了承を得ました。この件につきましては、廖先生の方から、中国の首脳にお伝えいただければと思います」。廖は目を輝かせ、大きくうなずいた(㉑: 301-10)。

1975年4月、三度中国を訪れた池田は副総理の鄧小平と会談した。会談の焦点は中ソ問題であり、鄧はソ連への不信感を口にした。池田は思った。「中国は本来、ソ連との平和共存を望んでいることは間違いない。ソ連もまた、それを望んでいるのだ。複雑な状況があるにせよ、両国の関係を改善できぬわけがない。私は、さらに中ソ首脳と全生命を注いで対話しよう!」(㉑: 347-9)。

1975年5月、池田は2度目のソ連訪問で首相のコスイギンと再会する。池田は「険悪化する中ソの関係を改善するためには、自分が両者の懸け橋になろうと覚悟を決めていた」。池田は思った。「誰にも評価されずともよい。21世紀のため、平和のため、人類のために、やらねばならぬテーマなのだ! ソ連と中国が、固い握手を交わし合う時まで、粘り強く、幾度となく、訪ソ・訪中を重ねよう……」(㉑: 391-6)。

1980年4月、池田が5度目に訪中したとき、ソ連訪問を控えるよう要請される。池田はこう答えた。「時代はどんどん変化しています。21世紀を前に、全人類を平和の方向へと向けていかななくてはならない。もはや大国が争い、憎み合っている時ではありません。『お互いのよいところを引き出しながら、調和していこう』『人間が共に助け合って、新しい時代をつくっていこう』という人間主義こそが、必要なのではないでしょうか」。「私は中国を愛しています。中国は大事です。同時に人間を愛します。人類全体が大事なんです。ソ連の首脳からも『絶対に中国は攻めない』と明言していただき、お国の首脳に伝えました。中ソに仲良くなってもらいたいのです。私の考えは、いつか必ずわかっただけでしょう」(㉑: 350-1)。

1989年5月、中国とソ連が関係正常化を宣言する。池田は「中ソ両国の平和共存を胸に描き、祈りに祈ってきた。また、一民間人という立場で動きに動き、両国首脳たちに、相互の平和友好を訴え続けてきた」。それゆえ、「進展する中ソ関係正常化のニュースに、熱い感慨が込み上げてきて仕方なかった」(㉑: 352-3)。

6. 日中友誼の民間交流

池田大作は日中間の幅広い文化交流を民間次元で繰り広げ、両国の相互理解を進めている。1974年5月、池田は初めて訪中する。出発日の朝、池田はこうあいさつした。「政治・経済次元での交流は、とすれば、力の論理や利害が優先され、すきま風が生じてしまう場合があります。両国間の文化交流を第一義として、また、民間次元で、人間と人間の真実の友好を促進し、永久的な、揺るぎない平和の基盤を築き上げていきたいと決意しております。特に、教育こそ新しい文化創造への一つの源泉であるとの認識に立って、新中国の教育の在り方を視察し、意見交換できれば嬉しいと思っております。また、訪中団のメンバーの多くは青年です。したがって、新時代を担い立つ中国の青年や学生たちとの交流を、積極的に図っていききたいと願っております。その交流を通して、両国青年の相互理解を一段と深め、信頼と友情の絆を確たるものにしていければと思います」(20:20-1)。

北京で出迎えた中日友好協会の孫平化^{そんへいか}秘書長は、「中国は、まだ貧しい国です」と語る。池田は「その言葉から『中国は将来、必ず、大発展を遂げていくだろう』と確信した」(20:31-2)。池田の一行は、北京市の新華小学校や付属の幼稚園に案内される。池田は「訪中の最大の眼目を、教育交流においていた。万代の日中友好を願うならば、中国と日本の若き世代の交流の道を、広々と開く必要があると考えていたからである」(20:36)。中日友好協会主催の歓迎宴で、廖承志は「山本先生！創価学会は、中国で布教してくださっても結構ですよ」と語る。池田はこう応じた。「その必要はありません。今、中国は、毛沢東思想の下で建設の道を歩んでいます。そのなかで人びとが幸せになっていけば、それは仏法にもかなったことになります。貴国の平和と繁栄が続けばよいのです」。池田は「中国で布教していくために訪中したのではない。訪中は、万代にわたる『友誼の道』を開くためであり、平和建設の信念に基づく、人間主義者としての行動であった」(20:46-9)。初訪中の一切の予定を終えた池田は、中日友好協会の関係者と懇談した。ここで池田は「人間を集団化された階級としてとらえて、判別するのではなく、一個の人間という視点に立って、人間を見ていくことが、今後の中国の発展のうえで、大きな力になるのではないかと語った」(20:146)。

1974年12月、池田は2度目の訪中で北京大学日本語学科に学ぶ学生と懇談する。池田は「学生たちの、日本人に対する『心の壁』を取り除きたかった」。そのためには「触れ合いを通して、同じ人間として心を通わせ合い、信頼と友情の絆を結ぶことだ。歴史のなかでつくられてきた『わだかまり』や『誤解』という氷塊を溶かすものは、友誼への情熱であり、人間の心と心の触れ合いから生まれる温もりである。ゆえに、民衆次元の交流が、何よりも大切になるのである」(20:320-1)。

1975年4月、3度目の訪中で池田は上海市^{しゃんはいし}の関係者らにこう述べる。「中国は商工業などが発展し、大きな経済成長を遂げ、必ず世界をリードする国になります。そこで大事になるのが心の豊かさであり、人間の精神性をいかにして培うかであると思います。経済的に豊かになっても、人間が欲望の奴隷のようになってしまえば、社会は殺伐としたものになってしまうからです」。池田は船上から長江^{ちやうこう}を展望し、「日中両国は、まさに一衣帯水であると、しみじみと感じた。彼は思った。この川が東シナ海に注ぎ、その先は日本だ。日本と中国は、海によって隔てられているのではない。海によってつながっているのだ。もっともっと交流があってしかるべきだ。さらに、友好促進を図っていかねばならない。」(21: 217-9)。

1978年9月、4度目の中国訪問を果たした池田は、中日友好協会の人々と交歓のひと時をもつ。池田は思った。「中国は仏教伝来の大恩ある国である。日中の平和のためには、そうした歴史も踏まえ、幅広い文化・友好交流が必要であると、彼は考えていた。仏法の慈悲や生命の尊厳という法理を、人類の共有財産にしていくには、仏教関係者をはじめ、さまざまな宗教の指導者との対話が不可欠である。いや、宗教を否定的にとらえる共産主義国の首脳とも、胸襟を開いた対話を重ねていく必要がある」(28: 244-5)。この訪中で池田が訪れた「南京は、江蘇省^{こうそしやう}の省都で、古代から都となり、中華民国が成立した時には、臨時政府が置かれ、国民政府の首都にもなった。1937年(昭和12年)には、日中戦争で日本軍が侵攻し、大きな惨禍を刻む歴史の舞台となったのである。伸一は、ここで多くの尊い命が奪われたことを思うと、激しく胸が痛んだ」(28: 288)。

1980年4月、池田は5度目の訪中を果たした。その際、池田は北京大学で記念講演を行う。この講演は「新たな民衆像を求めて——中国に関する私の一考察」と題していた。ここで中国文明の底流には「個別を通して普遍を見る」ことがあると論じ、「新しい普遍主義」の主役となる新たな民衆像の誕生を期待したのである(30上: 237-41)。

1992年10月、池田は第8次訪中を果たした。この訪問では中国社会科学院で「21世紀と東アジア文明」と題して講演している。彼は「東アジアに共通する精神性を特徴づけている『共生のエートス(道徳的気風)』について論及し、世界は、人間と人間、また人間と自然が『共生』していく思潮を必要としていると、強く訴えた」(30下: 349)。

7. 創価大学と「周夫婦桜」

池田大作は創価大学で日本と中国の青年を育て、日中間の教育交流を発展させている。1971年4月、池田の創立した創価大学が開学する。ここで中国研究会を結成した学生たちは、1968年に池田が行った日中国交正常化の提言に、強い触発を受け

ていた。創立者の池田は、21世紀のために日中友好の流れを命がけて開いた。この流れを受け継ぐことが、自らの使命と考える創大生は少なくなかった。「創立者の理想を胸に立ち上がった、彼らのその決意こそ、創価大学と中国との交流の源流であった」（⑮：138-9）。

1974年9月、池田はソ連を初訪問している。その折、モスクワ大学総長のホフロフと懇談した。総長室に飾られていた織物は、北京大学から贈られたものであった。ホフロフによれば「国家間の対立はあっても、ソビエト人民は中国人民に好意をもっており、友人と思って」いる。池田はこう思った。「これだ！ これなんだ！ 教育交流のなかで育まれた友情と信頼は、国家の対立にも揺らいではない。この流れを開いていくのだ！」（⑳：181-4）。

1974年末、池田は在日中国大使館に一等書記官として赴任してきた金蘇城^{きんそじょう}と懇談している。その場で、中国人留学生の受け入れ先を探しているとの話があった。池田は自らが身元保証人となって、創価大学に留学生を受け入れるよう取り計らうことを約束したのである（㉑：138）。これは日本留学の思い出を語った周恩来への恩返しにもなると、池田は考えた。そして、1975年の春に創価大学は中国政府の派遣留学生を受け入れている（⑮：290）。

1975年4月、創価大学の滝山寮では入寮式が行われた。中国人留学生を歓迎するため、池田もこの式に駆けつけた。池田は思った。「私がつくった創価大学に、中国から留学生として来てくださった方々である。何があろうが、この青年たちを守り抜き、一段と成長した姿で中国に帰っていただくのだ。そうしなければ、周総理に申し訳ない」。この日、池田は留学生を桜の咲く、夜のキャンパスに案内した。その後、教職員と学生に言った。「中国から選ばれた優秀な学生です。私は大切な家族だと思っています。くれぐれもよろしくお願いします！」（㉑：137-42）。

池田は「全精魂を傾けて、日中友好の金の橋をかけようとしていた。その橋を創大生たちが渡り、万代にわたる友誼の道を開いてくれることを、彼は、強く確信していたのである」。中国人留学生が創価大学で学ぶようになると、中国研究会の活動も広がっていく。部として留学生を応援し、留学生からは中国語などを教えてもらった。さまざまな思い出を刻みつつ、深い友情が結ばれていった。創価大学では中国の大学と次々に交流が始まり、中国研究会から多くの学生が中国へ留学していった。また、中国研究会出身卒業生の多くが、日中の交流に尽力している（⑮：140-1）。

1975年4月の第3次訪中に際し、池田は上海市による歓迎宴であいさつした。そのなかで魯迅と藤野先生の交流に触れ、こう話した。「私は、創価大学の教師、学生と、中国からの留学生の間にも、このような美しい友情が育まれることを念願しております。いな、そうなるように最大限の努力を払ってまいります」（㉑：220-3）。

1978年9月の第4次訪中の折、池田は党副主席の李先念と会見する。李は日本との教育交流を希望していた。池田は「今こそ日本は、中国からの留学生を全面的に支援し、教育交流を実施する大事な時を迎えていると思った」。日中の留学生交流は1400年前に始まる。日本は遣隋使・遣唐使を派遣し、国際情勢や文化を学んだ。また、明治の後期から日中戦争の開戦まで、中国は多くの留学生を日本に送った。戦後、再び日本が正式に中国の留学生を迎えたのは1975年であった。創価大学が、国交正常化後初となる6人の留学生を受け入れたのである。池田はこう書いている。「青年たちが信頼に結ばれば、政治や経済が困難な局面を迎えても、時流に流されない友情を育む、万代の友誼の土台となるにちがいない。そのためには、留学の制度を整えることはもとより、受け入れる日本人も、また、留学生も、さまざまな違いを超えて、`友、として接していこうとする心をもつことである」(28: 329-32)。

1979年4月、池田は創価大学を訪問した中華全国青年連合会一行を、「文学の池」のほとりに咲く「周 桜」の前で迎える。池田は彼らに「周桜」の由来を語った。この桜は1975年11月2日、周恩来の健康と日中友好を願い、池田の提案によって中国人留学生たちの手で植樹された。その前年の12月、周は北京の入院先の病院で池田と会い、中日友好と世界平和への願いを語った。「この会談のなかで総理は、懐かしそうに、桜の咲くころに日本を去った思い出を話された。私は、『ぜひ、また桜の咲くころに日本へ来てください』と申し上げました。総理は、『願望はありますが、実現は無理でしょう』と言われた。大変に残念そうなお顔でした。だから私は、総理が愛された桜の植樹を提案して、その志を受け継ぐ中国の留学生たちに植えていただいたんです」。周は、桜の植樹からおよそ2カ月後に逝去した。「深い大きな悲しみのなかで、私は誓いました。総理が念願された中日友好に一身を捧げ、必ず永遠のものにしよう」と。この決意を込めてこのとき、池田は高占 祥 団長とともに、周と鄧穎超夫人を讃える「周 夫婦 桜」を植樹したのである (30上: 37-40)。

1979年4月、創価大学第9回入学式の後、池田は大学の正面玄関ロビーで中国人留学生を迎えた。「わが創価大学へようこそ！ 創立者として、心から歓迎いたします。また、私の創った大学で学んでくださることに、深く感謝申し上げます」。「皆さんの双肩に、中国と日本の未来がかかっています。皆さんが学んだ分だけ、中国の日本への理解は深まります。皆さんが交流を結んだ分だけ、日本の中国への理解は深まります。ともどもに平和の`金の懸け橋、を守り、築いていきましょう」。留学生は目を輝かせ、傾きながら池田の話を聞いていた。玄関ロビーを出ると、創大生が集まってきた。池田は「中国からの三期目となる留学生が到着しました。みんなで学生歌を歌って歓迎してはどうだろうか」と提案した。学生たちはすぐにスクラムを組み、留学生もその輪に加わった。学生歌が春の夜空に響いた。「創立者も、学長も、力の限り手拍子を打つ。スクラムが右に左に揺れ、熱唱が一

つにとけ合い、天に舞う。伸一は、日中友好の未来を思い描いた。平和へと続く希望の灯を見た」（③⑩上：43-6）。

むすび

本稿では、日中友好の「金の橋」を築いてきた池田大作の中国観を全体的に考察してきた。小説『新・人間革命』は池田の代表的な著作である。同書は世界中の創価学会員に大きな影響を与えている。また、同書は世界の識者からも高く評価されている。同書は池田の中国観を研究するにあたり、参照すべき一次資料と言える。本稿では同書全30巻を分析対象としている。同書の量的考察によれば、同書は中国の人々の息づかいを伝え、この国のさまざまな話題を取り上げている。また、中国における人間の交流を最も重視し、この国を温かいまなざしで見つめている。このように、同書は中国に暮らす人間に焦点を当てていると言うことができる。

『新・人間革命』の質的考察によれば、「仏教・創価学会」の分野において、池田は「日中国交正常化提言」を発表し、日中国交正常化の突破口を開いている。「歴史・国際関係」と「政治・経済」の分野では、池田は日中国交正常化に決定的な役割を果たし、周恩来と永遠の友情を結んでいる。また、池田は中国とソ連の懸け橋となり、中ソ関係正常化に大きく貢献している。「民間交流」の分野では、池田は日中間の幅広い交流を民間次元で繰り広げ、両国の相互理解を進めている。そして、「平和・文化・教育」の分野において、池田は創価大学で日本と中国の青年を育て、日中間の教育交流を発展させている。このように、同書は池田が日中友好の「金の橋」を築くため、自ら先頭に立って行動する姿を描いていると言うことができる。

以上の考察から、池田の中国観における特長が浮かび上がる。第1に、「人間主義」に貫かれていることである⁵⁾。池田は仏教を基調とする人間主義者として、民衆次元から中国および世界との関わりを考えていた。国交もその本義は人間の交流にあり、民衆の交流にあるからである。『新・人間革命』に登場する山本伸一は中国の大地を駆けめぐり、信頼と友情の絆を結びつづけた。池田の中国観は、日本における幾多の中国観では人間が置き去りにされていることを忘れさせる。どこまでも人間を見つめ、人間を愛し、人間のために闘う池田の中国観を、本稿では「人間主義」的中国観と呼ぶものである⁶⁾。

第2に、行動と結びついていることである。池田の中国観は、単なる「見方・考え方」ととどまらない。それは数々の訪中で直接体験したこと、中国の人々との幅広い対話と交流に裏づけられている⁷⁾。また、池田の中国観は自らの行動によって表現され、その行動によって具現化されていく。池田は日中友好のため、命を懸けて「日中国交正常化提言」を発表した。そして、その提言を現実のものとするべ

く、誠実に、勇敢に、粘り強く行動した。やがて、日本と中国は国交正常化の日を迎え、中国とソ連も国交を正常化し、日本と中国に幅広い交流の道が開かれ、創価大学では中国との教育交流が始まるのである。

第3に、「金の橋」に象徴されることである。池田は『新・人間革命』のなかで、日中友好の「金の橋」を描いている。創価大学は周恩来への恩返しとして、戦後初めて中国政府の派遣留学生を受け入れたのであった。池田は創大に、魯迅と藤野先生のような美しい友情が生まれることを願った。青年たちに結ばれた信頼は、日中友好の土台となるからである。池田は「金の橋」を創大生たちが受け継ぐことを信じた。そして、池田は日中友好を永遠ならしめるため、「周夫婦桜」を創大に植樹した。池田は日中友好の「金の橋」を創大に託したのである。

池田が描く「金の橋」は、日中友好の未来をつないでいる。

注

- 1) 本稿のテーマについて、外国語ではいかなる研究が生みだされているか。また、池田は中国における記念講演や中国識者との対談集などではこの国をいかに論じているか。さらに、日本におけるさまざまな中国観のなかで、池田のそれはどのように位置づけられるか。各種の制約から本稿ではこうした問題を割愛し、今後の課題としている。
- 2) 文献を示す割注において、『新・人間革命』は巻数とページを記すことにする。例えば、「①：2」は「同書、第1巻、2ページ」のことである。
- 3) 池田は「山本伸一」という仮名で登場する。
- 4) 『新・人間革命』から直接引用する場合、改行によって生じたスペースを省略している。
- 5) 池田が提唱する「人間主義」は、「仏教的人間主義」と規定することができる（宮川 2017）。また、池田はソ連・ロシアにも「全人性」を見出している（宮川 2009）。
- 6) 栗原彬は戦後日本人のアジアへの関心型を、①歴史的な「贖罪型」、②文化的な「郷愁型」、③社会的な「偏見型」、④政治的な「教義型」、⑤経済的な「利害型」、⑥平和的な「実存型」、⑦創造的な「自律型」に分類した。池田の中国観は、主にここで言う「実存型」と「自律型」に立脚したものと考えられる（栗原 1982：231-44）。
- 7) 馬場公彦は戦後日本における中国論の担い手を次のように区分している。①「日本共産党を中心とする社会主義者系親中派」、②「欧米ジャーナリスト」、③「政財界親中派」、④「中国残留日本人」、⑤「反共中国論者」、⑥「反中国論者」、⑦「現地ジャーナリスト」、⑧「現代中国研究者」、⑨「シノロジスト（古典中国学者）」、⑩「新左翼活動家・理論家」、⑪「現代中国文学者・作家」である（馬場 2010：403-8）。池田は宗教指導者、平和活動家、作家・詩人、教育者とさまざまな顔を持つ。池田は上記の区分に収まらない、戦後日本における中国論を新しく担う一人であると言える。また、馬場は上記の担い手による中国「認識経路」を以下のように整理している。①「現

状分析型」、②「学理研究型」、③「党派思考型」、④「アジア連帯型」、⑤「指令呼応型」、⑥「革命同調型」、⑦「内発的發展重視型」、⑧「客体観察型」、⑨「相互対称型」である(馬場 2010: 412-25)。池田による中国認識経路の基軸は、ここで言う「相互対称型」であると考えられる。

参考文献

- 池田大作 (1998-2018) 『新・人間革命』全30巻、聖教新聞社。
- 池田博正 (2018) 「小説『新・人間革命』研さんに当たって」『聖教新聞』2018. 10. 3: 3。
- インダンガシ、ヘンリー (2018) 「私の読後感 識者が語る ケニア作家協会ヘンリー・インダンガシ会長」『聖教新聞』2018. 11. 21: 3。
- 栗原彬 (1982) 『歴史とアイデンティティ——近代日本の心理 = 歴史研究』新曜社。
- 胡金定 (2016-2020) 「創価学会と中国——日中友好の懸け橋担う創価学会の真実」／「池田大作と中国——万代にわたる日中友好」『第三文明』。
- 西園寺一晃 (2008) 「池田会長が示した偉大な勇気と先見性。」『潮』2008. 10: 203-5。
- 佐藤優 (2020) 「池田大作研究 世界宗教への道を追う」『AERA』2020. 3. 16: 30-3。
- 聖教新聞社 (2020) 「人間革命検索サービス」、https://www.seikyoonline.com/search_novel/、2020年3月16日閲覧。
- 創価学会 (2020a) 「池田大作先生の足跡」、<https://www.sokanet.jp/daisakuikeda/index.html>、2020年3月16日閲覧。
- (2020b) 「小説『新・人間革命』に学ぶ」、https://www.sokanet.jp/recommend/human_revolution/、2020年3月16日閲覧。
- 馬場公彦 (2010) 『戦後日本人の中国像——日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』新曜社。
- 樋口勝 (2013) 「尖閣諸島問題に見る日中関係の課題——池田大作の中国観を参考にして」『創大中国論集』(16): 47-77、[soudaichugokuronsyu0_16_7.pdf](https://www.soudaichugokuronsyu0_16_7.pdf)、2020年3月16日閲覧。
- 宮川真一 (2009) 「ロシア『全人性』の母なる大地——池田大作先生のソ連・ロシア観」『通信教育部論集』12: 69-87。
- (2017) 「現代世界における文明論的パラダイム・シフト——『仏教的人間主義』の可能性」『通信教育部論集』20: 69-84、[tusinkyoikuburonsyu0_20_6.pdf](https://www.tusinkyoikuburonsyu0_20_6.pdf)、2020年5月23日閲覧。
- 孟慶福 (2008) 「日中国交正常化の推進力となった提言。」『潮』2008. 10: 206-7。
- ラダクリシュナン、N. (2018) 「インド ガンジー研究評議会議長 N・ラダクリシュナン博士 (インタビュー)」『聖教新聞』2018. 9. 11: 2。